

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

コメント&リプライ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 兼重, 努, 呉, 偉峰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008866

コメント&リプライ

兼重 呉先生、ご発表ありがとうございます。今日のご発表で、広西博物館の室外の展示のことについて、よく理解できました。今日のご発表のキーワードは、室外の展示、あとは民族、文物、観光、それと都市文化と結びついた博物館といったことだと思いますが、もう1つ印象に残りましたのは、民族文物という1つの概念。これは歴史文物とは全く異なったものとして、それを軸に展示を進めていこうとされていることが、よくわかり、勉強になりました。

私個人は、1989年と1999年の2回ほど、民族文物苑を参観させていただきました。最近ちょっと足が遠のいておりますので、また行ってみたいと思っています。

それでは、質問をいくつかさせていただきたく思います。時間があまりありませんので、簡単に申し上げます。

広西博物館、民族文物苑というのは、広西自治区クラスの権威を持った博物館です。民間のいろんな民族文化村とは違った、非常にオフィシャルな権威を持つと思います。その意味で民族文物苑の参観者に与える、あるいは社会に影響は非常に大きいものだと思います。

その場合に、参観に来た人々に、広西壮族自治区に住んでいる、さまざまな民族の民族文化をどのように見せるかということは、非常にオフィシャルな影響力を持って、ほうほうに影響を与えようと思わなくても、その結果、広西の少数民族文化に関する言説とかイメージをつくっていく作用を果たしていく。それが今後とも続いてゆくと思います。

博物館の役割は、すでに存在するものを収集・展示して紹介するというのが一般的な印象ですけども、今日のご発表でおっしゃりましたように、広西民族文物苑の場合は、新たな民族文化をつくっていく。そして現代文化と融合させるという点で、従来の博物館の役割を超えた意欲的な取り組みをされている。しかもそれを文化産業の一端ととらえて、積極的な取り組みをしていこうという点で、ますます各方面に影響を与えていかれることだと思います。

そこで、私の方で4つほど質問があるんですが、まず最初は、民族文物苑の方針というのは、広西の少数民族文化のいろんなもののうちのよいもの、すばらしいものを集中して集めるという1つの戦略があると思うんですが、そうした戦略をあまりに強調しすぎると、次のような問題が出てくるのではないかという気がいたします。それは少数民族の方々の方々の生活の実態とかけ離れたイメージ、すなわち、実際農村に住んで生活している少数民族の方々の方々の生活と乖離したイメージを参観者に与えてしまう恐れはないのかという懸念です。

ただし、この点は先ほど紹介がありました、民族生態博物館が各地にあるので、それに任せておいて、南寧の民族文物苑ではそれとは違った路線でいこうということかもしれませんが、少数民族文化の忠実な再現については、どのように考えておられるのかということが、最初の質問です。

2番目は、広西民族文物苑では、私の研究しておりますトン族の建築物、鼓楼と風雨橋の非常に立派なものが建っておりまして、トン族を研究している者としては非常にうれしく思いました。トン族の対外的な宣伝に非常に役に立っていると思いますが、しかし、その一方で、建築文化にあまり特色のないと思われるムーラオ族とかキン族（広西に住んでいるベトナム人）、そういった民族の方々の展示は室内にはおそらくあると思いますが、室外の民族文物苑の展示から全くはずれてしまっているという印象を持ちました。

そういった場合に、はずれてしまった民族の民族文化は見るべきものがないのかという誤った印象を観客に与えてしまうことにならないだろうか。あるいは、見るべきものがないという印象以上に、その民族自体があたかも存在しないような印象を与えてしまうようなことはないのかという懸念があります。文化にあまり際立った特色がないと思われるような民族の方々の展示ということに関して、将来的にどのように考えておられるのかというのが2つ目の質問です。

あと、観光を意識した展示ということでしたが、その点について2つお聞きしたいんですが。広西文化大省ということで、民族文物苑を使って文化を売り込む、文化を観光資源として使うという戦略、その場合は少数民族の文化を使うということなんですけれども、雲南省とか貴州省のような、近隣の少数民族が多い省との競合関係が出てくると思います。

紹介されましたように、広西文物苑は、実は先駆的な、先駆けとして展示を行ってきたということですが、最近は各地でさまざまな施設ができてきて、競争は厳しくなっていると思うんです。私は広西の少数民族を研究しているんですが、日本では広西といっても実は知らない人が多くて、「雲南だろう」とか「貴州だろう」とよくいわれるんですね。ということは、民族の数においても、インパクトにおいても、広西というのは対外的なイメージが少し弱いとされているところがあるんです。そういった中で、広西が民族文化大省として売り出す、勝負をすればしたら、どのような戦略を持っておられるのかというのが3番目の質問です。

最後の4番目の質問ですが、今日のご発表で、文物と観光と少数民族という3つの柱で、今までやってこられたし、これからやっていかれるということなんですけど、例えば観光に関しては旅遊局（観光局）、民族に関しては民族宗教事務委員会と、政府機関としては分かれているわけです。文化財に関しては博物館が専門の部署なんですけれども、今後、その3つの柱を中心にやっていかれる時に、3つの政府の部門、旅遊局と民族宗

教事務委員会と、いわゆる文物関係の役所の3つの部門が互いに協力しあって進めているとされているのか、それとも博物館が、文物関係の役所が、民族と観光の方を独自の路線でやっているとされているのか。もし独自の路線でいこうとされている場合は、民族宗教事務委員会とか、観光局とは違ったどのようなアイデアを持っておられるのかをお聞きしたいと思います。

呉 非常にすばらしい質問をしてくださいました。簡単に答えたいと思います。

時間の関係で、報告ではそれほど詳しく説明できませんでした。論文の中には、もう少しわかりやすく書いてありますので。

広西博物館、民族文化には広西の歴史が含まれています。石器時代から新中国ができるまでの歴史、これが私たちの展示の主な内容です。私たちのこの博物館は、先ほどもご紹介いたしましたように、このような内容のものを展示していきたいと考えています。

今コメントと質問をくださいました。私たちの方針は何かということですが、文物苑の方針は地域文化の特徴を展示していきたい。広西の異なった時代の、異なった特徴を紹介したい、広西のそれぞれの歴史の発展の軌跡、足跡を紹介したい。また団結、発展を紹介していきたいと考えています。つまり都市の文化、地方の建築などを紹介していきたいと考えています。

ここで強調したいのは、歴史文物、歴史文化を静と動の形で展示していきたいと考えます。例えば、建築を、彫像を、その実物を展示していきたいというのが私たちの考え方です。地方の特徴のある手工芸品、製品の開発利用、活用ですね。歴史文物の複製品をつくる。観光、旅行の記念品にする。これらも私たちのこれからの活動の内容の1つです。これからの運営、改革を歴史的に考えてみたいと思います。

2つ目の質問については、もういいですね。

3つ目の質問、広西の文化は雲南や貴州に比べて、あまりにも印象が薄いということですね。皆さん、あまりご存じないということです。昨日も、私たち、世間話の中で、雲南や貴州についてはよく知っているけれども、広西についてはあまりよくわからないといわれました。広西のさまざまな資源は雲南や貴州に劣るものではありません。「山水は天下の甲」といわれる桂林も広西にあるわけですね。あと、少数民族で漢民族を入れると12の民族、つまり広西は中国でも少数民族の種類と数が多いところです。民族文化の特徴もたくさん持っています。

また中国の西部では、広西にしか海はありません。ですから、私たちは海洋文化も持っているのです。さらに貴州と違って国境もあります。山水の文化、歴史の文化、民族文化、海洋文化、国境文化、非常に特徴があります。しかし、今までは多分宣伝が足りなかったんでしょう。十分に文化や民族について、観光として紹介するのが少なかったと思います。これから力を入れていきたいと思っています。

4つ目の質問、観光と文化をどう結びつけるかですが、博物館と観光の関係。広西の伝統的な従来の博物館は、集めて、展示して、研究して、教育してというのがこれまでの博物館の概念ですが、私はこれからは少し変えなければならないと思います。当然観光とも結びつけていかなければならないと思います。

例えば憩い、娯楽も博物館の中に取り入れていきたいと思います。特徴のあるもの、ほかと違うもの、そういう博物館をつくりたいと思います。中国の博物館、建築です。建物です。私たち広西にはその建物もあります。室内もあります。屋外もあります。憩いもできます。レジャーもできます。観光客が来たら地元の人たちと一緒に、博物館の室内の展示を見るだけでなく、屋外の部分もたくさんの空き地がありますので、そこでいろんな活動に参加してもらうことができます。

中国は今年の3月から小クラスの博物館、来年から全国の博物館で、文化部の系統が運営しているところは無料で開放されるようになります。ですから、いろんな方が来られるわけです。昔は学校や地域社会や旅行者が組織して博物館に来ていた、そういう状態でしたが、これから観光客は20倍になると考えています。来年から無料になります。つまりチケットは買わなくて自由に来ていいわけです。室内に来ることも屋外で見ることもできます。私たちは民衆のために奉仕するという意味で、これからも門戸を開放したいと思います。以上です。ありがとうございました。



民族文物苑入り口の巨大な銅鼓のレプリカ。中は茶室になっている。



トン族の風雨橋。内部はレストランとなっている。



チワン族の高床式住居。



ミャオ楼。中はレストランになっている。